

# わんりい

178号  
2012/ 11 /1

日中文化交流市民サークル「わんりい」  
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方  
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100  
<http://wanli-san.com/>  
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp  
◆「わんりい」HPのアドレスが上記になりました。



高齢社会の到来(雲南省・束河)

2012年8月 撮影：奥脇弘久

## 「わんりい」178号の主な目次

北京雑感(69)ホテル	2
私の調べた諺・慣用句(14)「大義親を滅す」	3
媛媛讲故事(48)「土中に隠したお金」Ⅲ	4
中国・城市めぐり(19)「成都市・そのⅢ」	6
【わんりい活動報告「ボイストレーニング講座」	8
【智子の雑記帳】「タイトル変更します」	9
松本杏花さんの俳句集「千里同風」より	9
「四姑娘山・写真だより」の里を訪ねて④小金から両河へ	10
モンゴル滞在日記Ⅱ	12
スリランカ紹介(62)「スリランカ人の物差し」Ⅱ	14
私の四川省ひとり旅(58)/4度目の康定で	16
町田発ボランティア祭・2012夢広場ホットレポート	18
「中国の笑い話③」	19
アジア映画鑑賞④スリランカ映画について(後)	20
「わんりい」掲示板	21

## 【表紙写真説明】

高齢化社会から「化」がとれて、すばり、高齢社会といわれて久しい。中国でも、同様な事態があるようだ。

この写真は麗江古城の西北、茶馬古道の宿場だった束河古鎮で撮った。昔からの街並みが保存されている旧跡なので、中国人の観光客も多い。銀製品を売る店が多く、「假一賠十銀器<sup>註</sup>」の大看板を掲げている店もある。店頭で皮製品を加工している店もある。特産品のようだ。

「老齡事業……」の横断幕を掲示していたのは、四方街のセンター的な店で、左側は銀行、救護所の機能もあるようだ。

どの街でも、老人集会所を見掛けるが、満員盛況で、麻雀などに興じている。お国柄というべきか。

(奥脇 記)

註:売ってる銀器が偽物(假的東西)なら、十倍で弁償する。つまり、「ここで売っている銀器は本物だよ」の意。

10月になって、北京の友人が3人相次いで日本にやってきました。その中の一人と会う為に、JRの田町へ出かけました。このホテルは、ネット上で北京から予約をしたのだそうで、ネットで見ると、住所は芝浦になっていました。田町には以前住んだことがあり、田町駅の芝浦口側には芝浦工業大学がでんと構えていて、教室棟らしい古い大きな建物が、狭い道に面して建っていたので、雰囲気も暗く、あまり発展性を感じることが出来ない町並みでした。それで、ホテルの住所にちょっと違和感を覚えながら出かけていきました。

ところが、田町について、芝浦口へ出て見てビックリしました。以前は狭かった階段が広がって、下りた先は広々としていました。夜になっていたのも、良くは分かりませんが、私が知っている田町駅の芝浦口とはスッカリ変わっていました。芝浦工大の校舎が無くなり、区画整理で道路を広げたようで、町並みがすっかりしていました。友人の泊まったホテルは、以前、芝浦工大の校舎と校舎の間にあった運河の畔にありましたが、ドブ川然としていた運河も両岸に遊歩道が設けられて、ちょっと素敵な空間になっていました。北京の町並みの変化ばかりに目を奪われていましたが、東京でもこんなに大きく変化する余地があったのだと、改めて思い知らされました。

今年は、8月末に北京へ出かけました。大連から深圳へ行く間に5日程滞在したのですが、ホテルは、海淀区北太平庄花園路の、「維也納(wei ye na=ウイーン)」と言うホテルでした。このホテルは、以前黄土高原へ出かけた時に、飛行機待ちで一泊したことがあり、お値段の割には良いホテルだと感じているので、今回もここと決めて、友人に予約してもらいました。

実はこのホテル、ネットで予約が出来るのですが、アクセスしてみると、会員になれば安い会員価格で予約出来ると、会員になることを勧めてきました。友人が既に会員で、利用件数が多ければ多いほど会員としてのグレードが上がると聞いていたので、私は会員にならず、友人のカードで予約してもらうことにしました。

このホテルは、4、5年前から、中国全土でチェーン展開をするようになったのですが、名前から判断しても一部外国資本が入っているのでしょうか。全国展開

も南の方から出発して、現在北の方では、北京(2箇所)の他に、山西省太原にもあるようです。チェーン店が急激に増えるので、巨額の投資で、ホテルをどんどん新築しているのかと思ったのですが、どうやら違うようです。今回、北京から移動して、同じチェーン店である、深圳の「維也納酒店(梅林店)」に宿泊して、その経営戦略の一端が見えたような気がします。

深圳へ行くのは初めてで、ホテルを何処にしたら良いかも分からなかったのですが、この維也納ホテルの本部が深圳にあると聞いていたので、深圳ではこのホテルにしようと考えました。ところが、さすが本部の所在地だけあって、深圳には維也納ホテルが、4、5ヶ所ありました。それで、深圳市内の場所の選択も含めて、友人に予約を頼んだのでした。そして友人が選んでくれたのが、前述の「維也納(梅林店)」でした。ここでは、私たちの深圳行きの目的地「関山月美術館」まで、地下鉄2駅で行ける便利な所でした。

このホテルは、商店の立ち並ぶ中に、間口3間程の入り口があり、小さなホテルの印象でした。ところが、チェックインすると、エレベーターは奥まった右手にあり、5階で下りてみると、廊下が鍵の手に延びて、客室がずらっと並んでいました。ホテルの入り口は交差点の角から商店3、4軒行ったところにあっただけですが、ホテルは、交差点の角に立つ建物全体を使っているようで、高さは8階程あり、1階ごとの客室もかなりあって、そう小さいホテルではないようでした。

客室に入ると、新しくはないけれど、広さもまずまずで、なかなか快適でした。そして、バス(と言っても、シャワーだけですが)とトイレが大きなガラス戸で仕切られているのです。これは、北京のホテルと同じです。どうやら、このホテルチェーンは、古い、或いは営業不振のホテルをメンバーに迎えて、バス・トイレを改造し、PCが使えるように設備を整えて、外国人も宿泊出来るようにしているようです。日本のコンビニチェーンがフランチャイズ制で、地域の小売店をコンビニに変身させるようなものでしょう。

深圳のホテルは、北京とは違って、ホテル入り口の前にはドアマンがいるし、フロントの係員もかなり客あしらいが上手でした。以前は、北京の維也納ホテルより少しグレードの高いホテルだったのではないかと、勝手に想像しました。

# 私の調べた諺・慣用句 14 大義親を滅す

三澤 統

今回のテーマは「大義親<sup>しんめつ</sup>を滅す」です。

大義のためには親兄弟も顧みないとの意味ですが、必要があれば身内の者の殺害さえも辞さない覚悟を述べています。

日本は今でこそ身内や近親の者の命を犠牲にしてまでも大義を全うするような社会ではありませんが、歴史的にはかの戦国時代には、実際にそのような数多の例をみることができました。いずれにしても大時代的な慣用句なのですが、今回紹介しますエピソードは古代中国の物語です。

物語に入る前にまずは辞書を調べてみましょう。

## ▲小学館 デジタル大辞泉 (電子辞書) :

「大義親<sup>しんめつ</sup>を滅す “春秋左伝 隠公四年” から。君主や国家の大事のためには、肉親の情をも顧みない。大義のためには親兄弟をも犠牲にする」

## ▲小学館 中日辞典 :

「大義滅親 dà yì miè qīn 大義親<sup>しんめつ</sup>を滅す。正義のためには親兄弟の情をも顧みないこと」

この成語の由来は「春秋左伝<sup>1)</sup>・隠行4年」です。

中国古代の春秋時代に、衛<sup>2)</sup> 国の桓公<sup>かんこう</sup>には州吁<sup>しゅうう</sup>という母親の違う弟がありました。彼らの父親が衛国の庄公として在位の時に、州吁を溺愛したために、成長してから大変横柄で理不尽な性格になってしまいました。

庄公が没した後、桓公が後を継ぎました。一方州吁は日頃から謀反の準備を進め、君位を奪い取ろうとしていました。その目的達成のために、彼は大夫の官位を有する石碣<sup>せきせき</sup>の息子<sup>せきこう</sup>の石厚と近づきになりました。石厚は心根の悪い人物で、いつも州吁の謀反の気持ちを煽っていました。

やがて州吁は遂に機会を得て桓公を殺害し、そのまま君主の座に収まり、石厚は大夫に封じられました。

この二人はその後もいろいろと悪事を重ね、民衆を苦しめ殺害すらしめました。その為上は諸侯から下は民衆に至るまで、二人について、君主を謀殺し、民衆を苦しめる許しがたい存

在だと言いました。

人々に背かれ、親しい者からさえも見放されるような状況となり、石厚は州吁に石厚の父親である石碣のところ、どうしたら良いか教えを請いに行かせました。すると石碣は州吁に、「周の天子の信任を得られさえすれば、人々はお前たちを支持するだろう、周の天子の信任を得るにはまず陳国の桓公を訪ねることだ」と告げました。そこで州吁は贈り物を用意し、石厚と共に陳桓公に会いに出かけました。

ところが驚いたことに、実は、既に石碣から陳桓公に、“州吁と石厚が訪れたら直ちに捕え処刑するように”という手紙が届けられていたのです。その為、二人が陳国に着いた途端に捕えられ、州吁は処刑されてしまいました。衛国の人々は石厚は石碣の子供なので、殺されずに済むだろうと思っていました。しかし石碣は断固として処刑すべしと考え、家臣を遣って石厚を処刑しました。

「左伝」は石碣のこの公正無私な精神は“大義親を滅す”であるとして絶賛しました。“大義親を滅す”という言葉はこの時以来公正無私な精神を表す慣用句として長く人々に伝わりました。

## 〈注記〉

- 1) 春秋左伝 : 「春秋」の注釈書。30巻。魯の左丘明<sup>さききゅうめい</sup>著と伝えられる。春秋三伝の一。歴史的記事に富み、説話や逸話を多く集め、また、礼制に詳しく国家興亡の理を説く。(goo辞書より)
- 2) 衛国 : 衛<sup>えい</sup> (紀元前11世紀～紀元前209年) は、中国の周代・春秋時代から戦国時代にかけて河南省の一部を支配した諸侯国。(ウィキペディアより)



イラスト：叶霖 Ye Lin

月日の経つのは早いものです。周秀才の息子の長寿は賈仁の家で元気いっぱいになり育ち、いつの間にか立派な青年になりました。幼い頃のことはすっかり忘れてしまい、賈仁が自分の実の父親ではないことさえ疑うことはありませんでした。

しかし、養父の賈仁は、お金を命よりも重要だと思ふほどのケチで町でも有名でしたが、長寿は養父と全く違ってお金の使い道にあまり頓着しませんでした。友だちと気ままに遊興するばかりでなく、乞食には金額を気にせず施したりしましたので、長寿は人々から「銭舎<sup>註</sup>」というあだ名で呼ばれるようになりました。

長寿が成人して五、六年後に養母が亡くなり、さらに三、四年すると今度は、養父の賈仁も病気で倒れ、長寿がいよいよ家業を継ぐ日が近くなりました。

ある日、長寿は町へ遊びに行きたいと思いましたが、手持ちのお金に余裕がなくいろいろ考えた末、或る策を考えました。

「父上様が元気になるように私は何かをしなければと思っていますのですが、ちょうど明日『東岳廟』が大きな法要を行うと聞きました。私も『東岳廟』に行つてその法要に参加し、お父上の回復の願掛けをしたいと思うのですが如何でしょう？」

と賈仁に相談しました。

賈仁は大喜びで少しばかりのお金を長寿に与えながら言いました。

「このお金を持って行きなさい。父さんが元気になるようと神様に良く願つて来ておくれ！」

長寿は、父親の手からお金を貰いましたが、心の中で「こんな程度のお金ではなにも出来ないじゃないか」と思いました。そこで、長寿は父親の枕元から金庫の鍵をそっと抜き取り、沢山のお金を取り出すと家の下人を連れて出かけました。

二人は町で思う存分に遊び、更に豪華な食事をして、その上でやっと東岳廟へ向いました。

この東岳廟は広大な敷地を持つ名高いお寺です。大きな法要が行われる度に沢山の人々が集まり来ます。遠方から遥々やって来る人もいます。法要の様子を良い場所で見たいと、人々はいつも前の日から集つて来ました。

二人が東岳廟に着いた時には、境内はすでにどこもかしこも法要に参加する人々でいっぱいになっていました。二人は境内を一巡して、夜を過ごせる場所を探しましたが見つける事はできません。廟の廊下で一晩凌ぐしかないと感じを決めた時、ふと見ると粗末な服を着た夫婦が廊下の一角に設<sup>しつろ</sup>えたテーブルの前の椅子に坐っていました。

長寿は下人に言い付けました。

「あそこは良さそうな場所だなあ。お金を出して椅子を譲つて貰えないかどうか、あの夫婦に相談してみてくれないか」

「はい、分りました」

下人は夫婦の前に来ると偉そうな態度で言いました。

「おい！こんな良い場所は、あんた達のような人の居場所じゃない！早く俺の主人に譲つてくれ！」

夫婦の夫の方が吃驚して

「ご主人って、どなた様ですか？」

と訊きました。

「知らないのか？ 銭舎だよ！」

「私たちは地元の間人ではないので、あなたのご主人のことは分りませんが、私どもは明日の法要のために、名簿や文書などを書く仕事をさせて貰います。そんな訳で東岳廟の主事がこのテーブルと椅子を貸して下さいました。ですから、あなたのご主人にお譲りすることは出来ないのですが」

下人は更に大きな声で怒鳴り始めました。

「ものを書くといつても、そんなことはどこでもできるだろう？ 俺の主人がここが気に入ったのだから、さっさとどいてくれ！」

夫婦の夫が大変怒つて

「我々が先に来ているのです。藪から棒に何と理不尽なことを言うのですか!？」

と抗弁を始めたところへ、東岳廟の主事が来ました。

「こんなところで大きな声で喧嘩するとは何事だ！」

下人は言いました。

「俺の主人である銭舎様がこの場所を気に入ったと言っている。譲ってくれと交渉しているところだ」

主事は

「それは無理というものだ。夫婦の方が先に来ていたではないか」

下人はちょっと驚いたという感じで目をぐるぐる回してから続けて言いました。

「金を払ってこの場所を買うならどうだ？」

お金を払うと聞いて、今度は主事の気持ちが変わりました。夫婦に向かうと

「喧嘩を止めなさい。もっと良いところへ案内しましょう」

と言いました。

夫婦も、豪華な身なりでいかにも大家の坊ちゃん風の姿をした長寿を見ると、自分たちが比べようもない貧しく弱い立場から、仕方なく黙って主事についてその場を離れました。

実をいうと、この夫婦は、長寿の実の両親です。この十何年間、ずっと運が悪かったのです。頼りに出来る友人も、親戚もなく、まともな仕事を見つけられず、長寿を賈仁に託した後、ずっとあちこち転々として過ごして来ました。

近頃になって、息子のことや古里<sup>ふるさと</sup>のことが懐かしくなって来、帰途についたのです。長旅を続け、もう少しで古里というところにある東岳廟の前を通りかかったところ、丁度大きな法要が開かれるということを知りました。そんな訳でこの法要に加わり、先祖の供養をするとともに自分たちの運命を変えたいという祈願もあって東岳廟に立ち寄ったのです。そして廟の主事に相談した結果、書類書き

の仕事をして報酬を少しばかり稼げることになりました。

夫婦はここで長寿に会えるとは夢にも思っていませんでした。いや、たとえ顔を会わせたとしても、すでに十何年もの歳月が過ぎてしまったのですから、お互い昔の顔かたちとすっかり変わってしまって赤の他人同士に思われるに違いありません。

この夜、長寿は自分の両親から譲って貰った場所でぐっすり眠りました。しかし、あの貧乏な夫婦が自分と特別なかわりがある人たちとは露ほども考えませんでした。

翌日、盛大な法要が終わって、長寿が家へ帰ると、養父の賈仁の様態はますます悪くなっていました。急いで医者を呼び、いろいろな薬を飲ませました。しかし、どんな方法も養父の回復には結び付かず、それから二日後、賈仁は沢山の財産を残してこの世を去りました。

そして長寿は賈仁の正当な継承人として家の全財産を受け継ぐことになりました。

さて、周秀才夫婦は、「東岳廟」の法事で先祖を供養の後、古里へ向かい、やっと十何年かぶりに古里の町に辿り着きました。

元々身体があまり丈夫でなかった周秀才の妻は長い旅の疲れがあっただけか、突然胸が痛くなりました。周秀才が周辺を捜すと、さほど遠くないところに薬局があり、玄関に「施薬」の看板が掲げてあります。

「もしかしたらただで薬を頂けるのか」と思い、夫婦は急いで入って行きました。医者に病状を話し相談すると、果たして薬をただで貰うことができました。しかもそれだけではなく、きれいな水までも持って来て「ここで飲んでしばらく休んで行けば良いでしょう」と親切に対応してくれました。

周秀才の妻は薬を飲んで約半時間後すっかり元気になりました。

(続く)

【註】 銭舎 : お金を施す人の意

望江楼公園を後にして、昼食をとりひとまずホテルに戻った。午後1時になったので、ロビーから外を見ると車が1台停まっている。箱根日帰り観光をご一緒した王玲さんが見えたのだ。すぐに駆け寄って再会を喜び合った。

運転席には男の人がいて、ご主人ということが分かった。やさしそうなお主人と握手を交わし車に乗り込んだ。私の中国語会話の能力では十分な意思疎通が図れないと思って、日本語のできる友人に来てもらったので4人でホテルを出発した。

どこに向かっているのか聞いてもらおうと、道教の聖地である青城山だという。途中2008年5月に発生した四川大地震の傷跡があるだろうかと車窓から見たが、そのような形跡は全く見られなかった。もっとも3年8か月余り経過しているので復旧したのであろうと思い、友達に聞いてもらおうと成都市内は殆ど被害がなかったそうで、そのあと行く都江堰(成都市内から約70km)周辺は、かなり被害が甚大だったと言われた。

市内から北西に伸びている自動車専用道路を40分くらい走っていくと、青城山と書かれた三角形をした大きなモニュメントが見えてきた。そこで車を止めてもらい、ご夫婦と一緒に記念写真を撮った。また車を走らせ、蛇行する坂道を登り切ったところの駐車場で止まった。そこには寺院が駐車場を取り囲むように建ち、そして大きな木々が林立し、如何にも道教の聖地を感じさせる雰囲気漂っている。真正面にはガイドブックでよく紹介されている山門が存在感をアピールしている。寺

院の数々はこの山門をくぐった先の山の中腹や山頂付近にあるのだが、ロープウエーはあるものの今回の旅行は時間が限られていたので、峰々を遠望するだけとなった。峰々には、いつか必ず来るよと心の中で呼びかけた。

青城山の名前の由来を調べると、常緑樹が多いため四季を通じて豊かな緑に囲まれており、緑の城のように見えることからこの名がついたという。またこの山は、前山と後山からなり、なぜか前山には道教寺院、後山には仏教寺院が建てられている。このあたりは地震の被害をかなり受けたと見えて、海拔1260メートルの前山の頂上付近にある老君閣は、有名な道観らしいが大地震で倒壊した。再建された暁には開眼法要が営まれるそうだ。この旅行記が印刷される頃には完成しているかもしれない。いずれにしても青城山がど

のようなところなのか、案内して頂いたことはとても感謝している。

ここを後にして、都江堰に向かった。青城山から約10kmと比較的近い。ちなみに都江堰と青城山は2000年に世界文化遺産に指定されている。都江堰が近づくと木々の間から川が見え隠れしてきた。この川が岷

江である。その昔、この地方の農民を苦しめた川である。九寨溝上流にほど近いあたりに源を発し、成都平野に流れ下っていく。その成都平野の入り口付近に都江堰は造られた。簡単に「造られた」と書いたが、水流の豊富な大河を外江と内江に分けるだけでなく、洪水を防ぐため内江の水が一定量を超えると、溢れた水を外江に流すようにした「飛沙堰」や灌漑用水用



王玲さんご夫妻と、青城山入口のモニュメントの前で記念撮影をする。右端が筆者。



青城山の山門

の水門をつくるなどの工夫もしている。

今日の建設機械など全くない時代に、竹籠の中に石を詰め込み、それを足場にして少しずつ造り上げていったようだ。洪水により折角組んだ足場も何度か流されたことであろう。紀元前3世紀に始まった工事は、完成まで数世紀を要したという。人々のすさまじいまでのエネルギーを感じないわけにいかない。日本でいえば人柱を何百人も立てるほどの一大プロジェクトと言えようか。彼らの血のにじむような苦勞のおかげで成都平野はうるおい、「天府の国」と言われるようになった。

我々の車は、都江堰が見下ろせる高台の駐車場に止まった。すぐ近くの入り口で入場券を買って、(王さんが買ってくださった)入ると、すぐ下に降りる石段があり、ころばぬように用心しながら降りていく。結構急な階段なのだ。岷江を見ながら、という具合にいかない。

すると大きな寺院の屋根が行く手を阻むように軒を広げている。脇を通り抜け寺院を改めて見ると、正面の壁に「二王廟」と書かれている。大昔にこの地方を治めた王様が二人祀ってあるのかなと思っていると、友人が都江堰を造った親子を祀ってあると教えてくれた。

夜ホテルに戻った時、ガイドブックを調べると次のように説明されていた。「戦国時代(BC475年～BC221年)秦国

の昭王の時代、蜀の太守であった李冰は息子の李二郎と地域の人々と一緒に一大水利事業を着手。岷江の大きな流れを成都方面と長江方面に分けるとともに、灌漑用水用の水門などの工事の指揮にあたった。その功績を称えるため李冰親子を王として祀った。」とあった。この親子は神として崇めるに充分値すると、改めて思いを深くした。今から二千年以上前の話である。

二王廟の前には、スチール写真が二枚立てかけられていた。何かと思って近くで見ると、大地震によって

倒壊した時と倒壊前の二王廟であった。こなごなに壊れた無残な写真を見ると、いかにこの地震の揺れが激しかったかが想像できる。今見る復元された廟は、倒壊する前とそっくりに建てられていた。この廟は、地元に住んでいる人々の心の拠り所であることは想像に難くない。真っ先に復元の工事に着手したのであろうと思った。

さらに長い石段を下ると、瓦屋根が載っかっている高さ5メートルはあろうかと思われる白壁が行く手を遮るように屹立している。そこに一文字が上下左右1メートル程度の大きさに「造福万代」の四文字が浮き出ている。鄧小平の自筆のようだ。達筆である。「未来永劫に幸福をもたらす」の意味であるが、都江堰に捧げるにふさわしい言葉である。

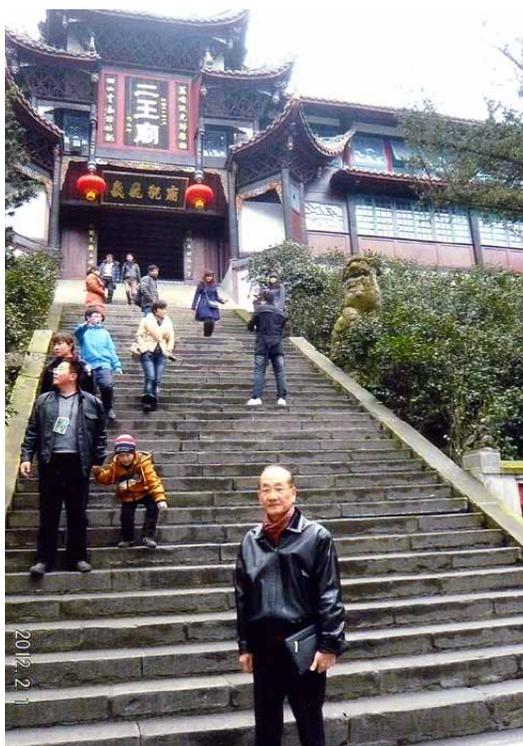
白壁を右に折れるとようやく眼前に岷江の流れが現れる。そして長い吊り橋が見え、観光客は皆そちらに向かって歩いている。吊り橋はまず中洲まで架けられているが、川幅が広いので中ほどに支柱が二本立てられている。この中洲から向こう岸までまた吊り橋で結ばれている。全長がおよそ500メートルあるという。

中洲はやはり竹籠に石を詰めたもので、積んで造られたいわば人工島である。この人工島はかなり細長い、1kmあまりあると思われる。木々も鬱蒼

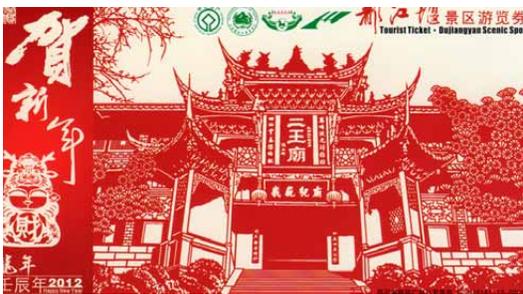
と繁っている。人工島の川上にあたるところが「魚嘴」(魚の口の意味)と呼ばれ、魚の口のように三角形をしていて、頂点にあたるところで外江と内江に水流を分ける役目を果たしている。

吊り橋を渡り右に歩くと、それが見られるような広場が作られている。土産物店も二、三軒あった。そして島の最下流部分が前述の、洪水対策用に造られた「飛沙堰」である。

ところで吊り橋であるが、渡り始めると揺れるので



都江堰「二王廟」と石段



都江堰・入場券

ある。それも少々の揺れではない。わざとこのような構造にしたのかと勘繰りたくなる。しかも川面から高く架けられていて、高所恐怖症の私は手すりを掴みながら慎重に渡った。渡り終えたときは本当にヤレヤレと思った。帰りはさきほど下ってきた石段を息を切らせながら登った。そばにいて同じように登った小学生が上に着いたとき、「累死我了」(死にそうだ、の意味)と言っていた。

太陽も大分西に傾き、長かった一日は終わろうとしている。ご夫妻に平日で仕事も休まれ、こんなに遠くまで案内して頂いたことを心から感謝した。そして持参してきたお土産を渡すためホテルに戻ると、これから皆で夕食を食べましようと言われた。予約もしてあるようなのでお言葉に甘え、また車に乗り込んだ。市内のどのあたりか分からないが、「老蓉客火鍋店」という看板の店の前で止まった。

もしかしてあの痺れるような四川料理かな、と思ったらやはり的中した。大連でも辛さ控えめの火鍋料理は何度か食べたが、成都に来たからには本場の痺れを感じようと覚悟を決めた。お店の中に入ると6時前というのにもう満員盛況である。予約してある席に着くと、中年の女性と可愛い女性が座っていた。王さんの妹さんと娘さんでお互いに挨拶を交わした後、6人で乾杯した。皆さん心から温かく私を迎えてくださり、本当に楽しい歓迎会となった。

ところで火鍋料理であるが、赤黒く煮えたぎっているところに肉や野菜などをつけて食べたが、聞きしに勝る辛さである。どうぞどうぞと勧められたが、口の中が痺れて味も分からないくらい。鍋の中心は仕切りがあり、熱い湯であったのでそれで薄めて食べた次第。しかし私を除く5人はおいしそうに次々に口に運んでいた。私は、中華料理はとても好きだが激辛の料理と香菜はどれも苦手である。四川人のDNAはどうなっているのだろうか。

約2時間の歓迎会は、無事終わりをづけ、帰途に就くことになった。食事中に、地下鉄1号線が2010年に初めて開通したと聞いたので、乗ってみたいと言ったのを王さんは覚えていてわざわざタクシーを拾い、「火車北駅」に連れて行ってくださった。そして4つ目のこの地下鉄の中心ともいえる駅「天府広場」までの切符を買っていただいた。切符はトランプの大きさと乗車賃は4元であった。

開通したばかりなので駅も電車もとてもきれいだ。ホームはガラス張りとなっていて、電車が入ってくると扉の部分が自動で左右に開く。現在2号線と4号線が建設中で、数年後はさらに機能的な都市になっていくであろう。「天府広場」駅で下車し地上に出ると、そこは美しい広場で明らかに成都市の中心と思われた。遠くに毛沢東の銅像があたりを睥睨するように立っていた。

(続く)

◆わんりい活動報告

**ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう!**

♪ 2012年9月30日(日)/10月23日(火) ♪ 於 : まちだ中央公民館・視聴覚室

これまで中国をはじめとしてアジア各国から来日された方々に自国の文化を紹介して貰うという形で活動してきた‘わんりい’としては異色の、上記表題の活動が月1回の予定で始まりました。

講師のエメさんは、東京藝術大学邦楽科長唄別科を卒業された日本女性で、エメは自身が活動されるときの名です。現在は、オリエンタルな風合いの、独特の魅力ある声で、様々なジャンルの歌を歌っておられ、同時に、ボイストレーニングの講師としても活躍中です。

第1回のエメさんのお話で、声も身体と言う楽器から出る音なので、‘声をよく出すには、身体をリラックスさせて、心を伸びやかにすることが大事’と言うことを教えて頂きました。身体の各部分を意識した発生練習では、下半身から、頭のてっぺんまで、今まで出したことの無いような声を出し、自分の声にビックリしました。また、顔

の筋肉を上下・左右に動かす練習では、自分の顔なのに、思うように動かすことが出来ないことがわかりショックを受けました。これは練習を重ねれば、出来るようになるそうです。口角に指を当てて、50音表を発音して、音の違いによる筋肉の動きの違いを確認しました。

身体を動かして1時間ほど、身体はうっすらと汗をかいて、大きな動きをしているわけではないのに、心地よい疲労感を感じました。その間に、口の中は、上の歯と下の歯が触れ合わないのが自然の状態なので、あくびをし終わった状態で、そのまま口を閉じるのが良いと伺いました。

最後の30分で、昔懐かしい「赤とんぼ」「里の秋」「旅愁」を歌いましたが、不思議と声が出やすくなり、思い切り声を出して自分が音痴であるとの意識を暫し忘れることができ、楽しい1時間半でした。

(報告 : 有為楠)

## タイトル変更します

「中国を読む」で2003年3月からスタートしたこの欄、一度範囲を広げて「アジアを読む」になり、知らないうちに「読む」と略され、そして今回、誰にも相談せず、許可も得ず、勝手にタイトル変更します。新タイトルは「雑記帳」をお願いします。

変更の理由は簡単で、書評以外の回が増えたから。今年に入って、真面目に書評を書いたのは4回、それ以外は4回。これでは「読む」の短いタイトルも「偽りアリ」で消えかねない。「雑記帳」なら、書評でもそれ以外でも受け入れてくれるはずのタイトルだから。

この欄を頂いた10年前。まだ社会に出たばかりの自分、「若いうちから1ヶ月に1冊、同じテーマの本を読んでいけば1年で12冊、10年で120冊、気が付けば貴方はそのテーマの専門家になれる」と、どこかで読み、書評欄にしたいと志願した。社会に出れば、自分が何も持っていないことを、痛いほど突きつけられる。10年後は、120冊の本をバック

に、「専門家」になりたかった、のだろう。結果、10年経ったが、結局私は何者たりえていない。きっと、このまま何者たりえないまま、年齢を重ねて、死んでいくのだろう。そして、何者かである必要もない、きっと。

だから、「専門家」を目指す必要もなく、この欄も「読む」である必要もなく、「書きたいことを書く」でお許しください。本を読んで思うことがあれば、それを書き、どこかの会議を傍聴して感じる事があれば、それを書く。旅行に行って面白いことがあれば紹介する。正直、何者かになろうと焦燥感を覚えて、ギラギラしていた時期のタイトルを、10年経っても引き継いでいくのは、ちょっとしんどい。

というわけで、今回より、この欄は「雑記帳」というタイトルになります。みなさま、今後とも、どうかよろしくお願ひいたします。(編集長、勝手なこととして、ごめんなさい！)

(真中智子)

松本杏花さんの俳句

qiān lǐ tóng fēng  
「千里同風」より

一面の稻田嘗ての渤海国

dàogǔ jīncàncàn  
稻谷金灿灿

liángtián wàn qǐng chèn lán tiān  
良田万顷衬蓝天

wǎngxī bó hǎi guó  
往昔渤海国

季语：稻田，秋。

赏析：本首和以下二首系作者参观渤海国遗址时所作。渤海国(公元六九八年至九二六年)是我国唐朝时代统治东北地区的地区民族政权。此作品表达了作者对沧海桑田的感叹。特色所在。

天高く大地押し並べ赤銅色

zhàn zhàn jiǔ tiān gāo  
湛湛九天高

dàdì píngzhěng wàng tiáotiáo  
大地平整望迢迢

hóng hèsè yāoráo  
红褐色妖娆

季语：天高，秋。

赏析：本首和以下三首系松本女士访问印度时创作的写生句。我国唐代诗人韩愈在《祭董相公文》中写道：“天高而明，地厚而平。”意为天高而显其明远，地厚而显其平阔。松本女士观览印度的无垠蓝天和广袤红土地，用大块色彩描绘出了亮丽壮阔的图画，可称为大手笔之作。



## 「四姑娘山・写真だより」の里を訪ねて④ 小金から両河へ 佐々木健之

山間地の地方都市丹巴では水源の水は綺麗だと思うが、泥水が供給されるのは解せなかった。住民は濁り水に対し苦情申し立てをしているのであろうか。以前読んだ本に、流れている水は綺麗(衛生的)だと、チベット人が言ったと書いてあった。そういうわけで濁り水に寛容なのであろうか。

夕食は前夜と同じ店で、食べた。メンバーの一人が心配顔に「料理も同じ水道水(泥水のこと)で作るのですか」と大川健三さんに尋ねたが、大川さんとしては明確には答えられなかった。

明けて12日も早朝散歩。今度はホテルのすぐ前を流れる大金川に沿って、下流方面へ歩いた。山歩きではなく市街地を歩くほぼ水平の散歩となる。ホテルから約2kmほど川を下ると、大金川と小金川の合流点の橋があり、散歩はここまでとする。橋の中央部まで進み、流れをのぞき込むと濁流が下流へと渦巻いていた。

橋のたもとに、ゴミ置き場があり、野良犬ではなくノラ豚が残飯をあさっていた。豚は資産価値があるので放し飼いの豚であろう。農村では放し飼いは普通だが、市街地でも居るとは思わなかったのが、最初見たときは黒く大きな野犬かと思わず驚いた。帰路は早朝ではなく「朝」くらいの時刻になったので、通行人や、散歩の老人、ジョギングをするカップルなど行き会った。こんな田舎にもジョギングする人が現れたのは、健康志向の流れであろうか。

朝食の後、本来の目的である近郊の植物観察と花の撮影。今度はオフロード車両に換えて、山村を往復した。先々で丹巴式チベット住居が美しかった。

夕食はいつもの、レストランで摂る。泥水のこと



ノラ豚がゴミ箱をあさっている。よく肥えていた。



丹巴を特徴付ける碉楼。写真ではよく分からないが、見上げるような遙か高みに建っていた。望遠レンズで引き伸ばしています。

話題にならなかった。慣れてしまえばそういうものと受け入れてしまったようだ。われわれは一時滞在の観光客だから、いつまでも泥水に関わらなくてよいのだ。だじゃれ風にいえば「拘泥」しない。

明けて6月13日は、移動日なので急がず、朝食が8時開始となった。そこで同室の河本さんを早朝散歩に誘い、再び山の村落を訪ねた。景色は2日前と変わらなかったが、物知り顔に説明するのが嬉しく、ゆっくりご案内した。

ホテルの裏にある、バスターミナル付近で簡単な朝食の後、3台の車に分乗して出発。今日の目的地は「両河郷」という山奥の村である。そこへ行くにはまず、小金川の上流「小金」の街まで行き、そこから支流に折れて山壁をめぐって進む(拙作連載①の地図参照)。

昨日と同じオフロード車3台で、まず少し川沿いに下り、丹巴の観光の目玉「碉楼<sup>ちやうろう</sup>」を見物した。道路端に、以前はなかった駐車場と専用の展望台ができていた。煙突のような石組みの碉楼を見ると、なぜかもの悲しい気分になる。歴史に埋もれた人々の影を偲ぶためか。

碉楼見物の後、小金川上流の街「小金」を目指す。しかし、途中の道路状況に問題があった。先の四川大地震で崩れた箇所を修復・改良の工事中なので、通行可能時間帯が決まっている。だから早めに出発しても閉鎖箇所が開門待ちとなる。通行止め時間は午前8～12時、午後13～17:30時である。言い換えれば、夜間早朝は通ってよいが日中は、わしら工事作業員の昼めし時間だけ通してあげるよ、というわけか。



「交通管制点」の看板。期間の表示がないので、いつまでかは不明。看板は手書きではなくしっかり作っている。



小金の街。車は少なく、車道を歩く。

丹巴を出発して3kmくらい進むと問題の通行止め箇所、「中路(土地名)派出所」に着いてしまった。時計を見れば開通時刻の12時まで1時間以上余裕がある。

いつになったら動くか分からない事故渋滞などと違って、決まった時刻になれば通れるのが分かっているのでイライラすることはない。先着していた数台の車の後ろに駐車して外に出る。

通行止めゲートは飲み物も売る小さな雑貨屋の前であった。店の前の粗末な長ベンチに、おさなごとお守り役の年寄り数人が座って暇つぶしをしている(ように見えた)。私とYさんは断ってから長ベンチの端に座らせてもらった。すると暇つぶし会の臨時会員に受け入れられたあかしの、ひまわりのタネを食べると奨められた。Yさんはこういう時のために、「戦略的折り紙」の用意があり、折り紙用紙や、完成した折り鶴をビニール袋に入れて持ち歩いていた。余談一折り紙は、本誌好評連載中の田井元子氏ほか、日本女性が旅の親善文化財として活用しているようだ。同様の効果は絵の上手な人が、スケッチをして人寄せ交流をしている。この場合は老若男女を問わない。

Yさんはビニール袋から折り鶴を子供に差し出すと、わたされた子供より、お守り役の婆さんの方が喜んだように見えた。ひまわりのタネが増配となって、暇つぶし会名誉会員に格上げされた。

ヒマワリのタネは暇つぶしに適している。中国人のように、手を使わずに素早く食べることはできないので余計時間がかかる。一つ一つ前歯で割ってから指先で核を取り出して食べるが、手間の割合にご褒美の量は少ない。だからお腹にもよいし、指先運動の訓練になる。猫にカツブシ、閑人にヒマワリのタネだ。

開門定刻20分位前に、通れるようになった。どんな大がかりな道路工事かなと、車中から観察した。けれども舗装工事のような道路を通り過ぎただけで、大がかりな道路工事は見なかった。

日本式の片側交互交通はしないで、一度にやってしまうのが中国らしい。

途中で歴史的「碉楼」を見学した。ここも立派になって観光名所となっていた。

小金の街に着いた。ここで、大川さんが根拠地としている四姑娘山の麓の村、日隆から回送してきた車両3台に乗りかえた。

小金の街で、食材を仕入れることとする。これから行く両河の村は田舎なので、生鮮食料を売る市場のような店は無く、食材に乏しい。そこで小金の市場で野菜などを購入して食堂で調理してもらう手はずとなった。

その前に腹ごしらえとなり、多くの客で活気のある「刀削麺」の店に入った。一行の中には「刀削麺」を見たことがない人もいて、調理場へ押しかけて、麺の切り入れを撮影する人もいた。

(続く)

#### ●前号「大川さんとウリさんの出会い」訂正します。

私と鳥里さんの初めての出会いは、2002年4月に「蜀山女神・第1集」を出版した頃、出版社の社長との会食の席で他の客と一緒に鳥里さんが紹介されました。当時、鳥里さんは成都で写真展を開いていて、見に来いと誘われましたが行けませんでした。出版社の社長はチベット族で康定に繋がりが有るため、康定出身の鳥里さんが会食の席で一緒になった訳です。

(大川さんからのメールより)

ちょうろう  
**碉楼**：丹巴の碉楼は木組みに石を組み合わせた建物で、戦いの際に立てこもるために建てられた。高さは16層や17層ほどあり上に行くほど細くなり、壁には外が狭く中へ行くほど広くなった窓が穿たれている。こうした窓は、外からは侵入しにくく、中から外の様子を見張って矢を放ちやすいようにできている。清の乾隆帝(1711～1799)が大金川・小金川を平定したころに多くが建てられた。

(ウィキペディアより改変)



### 7月8日(日)

ツォゴウとMと私の3人は、UB(ウランバートル)から空路ホブドに向かった。ツォゴウもこの3月まで東京の大学に留学していた。機内はナーダム休暇を故郷で過ごす帰省客で満席。9:40ホブド着(所要時間3時間)。UBとホブドの時差は1時間。モンゴルは東西に長い国なので、国内でも西と東では2時間の時差がある。

空港で私たちを迎えてくれたのは県知事(ツォゴウの父)の公用車の運転手で、車はトヨタのランドクルーザー。因みにナンバープレート0001は知事の手、0002は副知事、0003は…、と役職順に運転手付の公用車が決められているという。その0001の車で、空港から市内に向かった。ほんのちょっとしたボランティアと軽い気持ちで来てしまったけど、私たちってそんな待遇をしてもらっていいのかしら…? それとも、この国は家族も公用車を使えるの…?

私たちがボランティアをするところは、市の中心に程近い病院の一角にあった。一戸建て平屋の障がい者通所施設で、センターとよばれていた。入口でこやかに迎えてくれたのは、「障がい者親の会」の人たち4人。きょうは日曜日なので、施設の利用者はいない。

事務室に通されて、自己紹介の後、ボランティアの期間や内容などについての話し合いを、ツォゴウの通訳で行った。日本語も英語もここではまったく通じない。彼らは母国語のモンゴル語以外は、ロシア語なら分かるようだ。

明日からの4日間はナーダム休暇で、実際に“仕事”をするのは13日(金)からで、日曜を除く5日間の午前中ということになった。私たちの主な“仕事”は、利用者とその保護者に個々に会って、話を聞いて、助言すること…。私が思っていたボランティアとはだいぶ違うようだ。“学校に通えない障がい者達(子供ばかりでなく大人もいる)が家に閉じこもったままにならないよう、毎日ここに通ってきて、一緒に過ごして、遊んだ

り、作業したりするのを、私たちがちょっとだけお手伝いする”くらいに軽く考えていた。「親の会」代表のバイヤーは、利用者名簿のようなものを開いて、1日目はこの人とこの人というように、毎日5～6人ずつの割振りをしているようだ。だんだん気が重くなってきた。

打ち合わせの後、事務室のとなりの部屋に案内された。そこは普段は職員室として使っていて、主に学習面を指導する職員がひとりいるのだが、今は産休中。机と本棚と戸棚が一個ずつ壁につけて置いてある。そこが今夜からの私たちの寝室だ。部屋の中央の床に、セミダブルサイズの真新しい厚いマットレスが2枚敷かれて、寝具が用意されてあった。

時刻は12:00を過ぎていた。みんなで食事にかけた。県庁近くのボヤントホテルのレストランで昼食をとった。そこへ、ツォゴウが連絡したのか、彼女の両親も食事にやって来た。ツォゴウの卒業式で来日した父親とは、3月に東京で会っているが、母親とは初対面だ。

昼食後は「親の会」の人たちとは別れて、県政府主催の馬頭琴奏者の会に出席した。馬頭琴の演奏が聴けるわけではなく、ツォゴウの父親をはじめ、壇上にずらりと並んだ関係者が次々と演説し、それを通訳がロシア語にし、客席に座っていて呼名された人は、立ち上がってそれに応える。私たちも自分の名前を呼ばれたときに同じように立ち上がってお辞儀をし



聖なる岩山の麓での前夜祭

た。ツォゴウが言うには、私たちは馬頭琴の研究に来蒙した日本人、と紹介されたそうだ。

壇上の人たちの話はとにかく長い。客席には100人以上の馬頭琴関係者が座っている。全員を紹介するととなると、あと1時間では終わるまい…。途中でそっと会場を抜け出し宿舎に戻った。

夕食も「親の会」の人たちと食べ、会の誰かが用意してくれた車でナーダムの前夜祭を見にでかけた。会場は市内から車で30分くらいのところにあるモンゴル文字が刻まれた聖なる岩山の麓だ。この山は普段は登山禁止だ。蚊もたくさんいるので虫よけスプレー、夜は冷えるのでセーターも必携だ。

太陽が沈んで、8時を過ぎる頃、山頂に設えた点火台に麓から火の点いた矢が放たれ、それを合図に前夜祭が始まった。主催者側の長い演説や大統領からの手紙の代読に続いて、馬頭琴、打楽器、ホーミー、オルティンドー、踊りなどすべて終わったのは11時過ぎだった。宿舎に帰ったのは午前零時近かった。

今夜から夜はMと私のふたりだけ。入口の鍵は「親の会」の人が持って帰ってしまう。中からは開けられるが、締め出されると入れない。

ウランバートルでの4日間がのんびりしていたからか、盛りだくさんのきょう一日はととても長く感じられた。

## 7月9日(月)

冷蔵庫には、昨日のうちに「親の会」の人がパン・ヨーグルト・牛乳・果物などを用意してくれていたのので、朝食はそれで済ませた。9時過ぎに「親の会」の3人が迎えに来てくれた。昨日迎えてくれた人と違う人もいる。おそらく交替できょう一日私たちに付き合ってくれるのだろう。ツォゴウは用事がある、午前中は来られないという。さあ、困った、通訳がない、どうする？ Mのモンゴル語と“指さしモンゴル語”の本が頼りだ。

1日目のナーダムイベント会場は歩いて5分ほどの県庁舎前の広場だ。9時スタートの予定だったが、舞台設置やマイク準備などに時間がかかっているようで、いっこうに始まる気配がない。これがモンゴルでは普通のように、観客はのんびりと歓談しながら、待ち時間を楽しんでいる。民族衣装のデールを



広場でイベントを待つ人たち。後ろは県庁舎

着ている人もたくさん見受けられた。

実際に始まったのは11時過ぎだった。出し物は前夜祭と同じで、馬頭琴・歌・踊りなどを間近で見ることができた。2時半過ぎに午前中のプログラムが終わった。遅い昼食後、「親の会」の人たちに、ザハ(市場)に連れて行ってもらった。そこで午前中の用事を済ませたツォゴウと落ち合った。

このザハは入口で入場料を払う。中は細い路地が入り組んでいて、両側には店がぎっしり並んでいる。人・人・人ですれ違いもできないほど混雑している。迷子になったらどうしよう…。私たちはここで肉・野菜・果物・米・乳製品などの食料を買いこんだ。昨日からずっと、「親の会」の人たちに食事の世話になってきたが、ツォゴウを通して話をきいてみると、その費用は「親の会」から出ているらしく、ホブド県や市の補助はないようなのだ。センターには台所もあるのだから、明日からは自分たちで食事をつくらうと、Mと話し合っって買い物をしてセンターに帰った。「親の会」が電気鍋と電気釜を用意してくれた。

夜は文化宮で開かれたコンサートに出かけた。政府主催のものらしいが、ツォゴウの父親の関係者ということで首から掛けたプラスチックケース入りの“入場許可証”を見せると入場可。馬頭琴・ホーミー・オルティンドーなどを聴き、その後、誘われるままにパーティにも参加した。汚れたジーンズ・Tシャツからワンピースに着替えておいてよかった。ここでも、名前を呼ばれて、賞状のようなものまでいただいってしまった。私たちはここではどのように紹介されたのか、ツォゴウに尋ねるのを忘れた。きょうも

センターに戻ったのは零時ごろだった。

## 7月10日(火)

ナーダム2日目。ツォゴウが民族衣装のデールを着てみないかと、彼女の母親のデールを2着持ってきてくれた。きょうはツォゴウもデールを着用している。私はモスグリーンのデールを着せてもらった。デールはゆったりしたロングドレスで、ウエストに帯を巻きつけて、丈を調節する。首のところをきっちりとめるので、そこだけは窮屈に感じる。デールを着た3人は、きょうも0001の公用車で、モンゴル相撲会場のスタジアムに向かった。ここでも首から掛けた入場許可証で正面の特別席で観戦することができた。

相撲にはあまり興味がないが、力士の服装と勝者の所作は興味深かった。前見頃の長い長袖の上着、短いパンツ、先が反りかえったブーツ、真ん中が塔のようにとんがった帽子を身に着ける。勝者は敗者

のお尻を軽く1回平手で叩き、その後、鳥の羽ばたきのように両手を広げて舞う。体の大きな力士が子供のようなそんな動きをするのがおもしろい。

午後はツォゴウ家のサマーハウスに連れて行ってもらった。ホブド郊外のボヤント川支流の畔のゲルだ。ゲルに行く途中で、車は川を渡る。ランドクルーザーでない車だったら、かなり遠回りしなければならないだろう。そこでツォゴウの弟のジェンコに会うのも今回の旅の楽しみ(目的)のひとつだ。

ジェンコは13歳、彼は幼少時に脳性まひに罹っている。夏休みはホブドで過ごしているが、普段はUBにいて、特別支援学校に通学している。母子と父は、夏以外は、UBとホブドに別れて生活している。特別支援学校は、UB以外は、モンゴルにはまだつくられていないようだ。ホブド県知事のジェンコの父が、障がい者施設に力を入れて、応援するのも納得できる。ジェンコについては、また機会があれば書きたい。

(次号に続く)

### ぼくが見て感じたスリランカ紹介 62

## スリランカ人の物差し - そのⅢ

赤岡健一郎 (日本スリランカ武道協会  
日本スリランカ文化交流協会)

日本とスリランカで一番大きな違いは宗教・信仰でしょうか。スリランカでは信仰と日常生活が非常に密接です。

僕自身は檀家になっているのは仏教、でも結婚式は神前、クリスマスは大騒ぎ、ハローウィンや他の宗教行事も訳もわからずに乗って楽しむという口です。

スリランカに住んでみて、宗教に対する感覚の違いにビックリしました。この感覚の違いが、物差しの違いのオオモトのようです。前任地のイスラム教を主とするマレーシア、様々な宗教が目立たずに共存するシンガポールに比べても大違いです。

まずは赴任するために初めてコロンボ国際空港(現在の名称はバンダーラナーヤカ国際空港)に降り立ち、コロンボ市内までの約35kmの道のりを迎えに来ていた同僚の車で走った時に、沿道にある宗教関係の施設の多さに驚き、僕のスリランカに対する印象が変わりました。

日本からのフライトは通常真夜中に空港に着きます。初めての国なので興味津々で車窓の外を見ていました。空港からコロンボまでの道路にはほとんど照明がありません。真っ暗な中を車のヘッドライトの光を頼りに走っていると、数百メートルおきというより交差点毎にライトアップされた仏像や法輪が現れてきます。

仏教関係だけではありません。イエスキリスト像やマリア像、キリスト教の殉教者の像も数多くライトアップされています。さらにヒンドゥー教のものと思われる神様や人間や動物が絡み合った様な像も現れてきます。これらの像は地元の篤志家や宗教グループによって建造され寄付された物だそうです。

面白いのは、これらの像の周辺界限にはライトアップよりも薄暗い電気をつけた屋台の様な店があります。真夜中にも関わらず結構な人影があります。何の用があるのでしょうか、夜食かお酒でも飲

んでいるのでしょうかね。この他には野良牛が徘徊しているのにも驚きました。真っ暗な闇夜から目がギラッと光って車に向かって来るのですよ。この真夜中の野良牛が交通事故の原因に多くなります。新聞紙上には、車は大破したにも関わらず牛はピンピンしているなんて記事はよく載っています。

僕が駐在していたのはスリランカが内戦状態の時期でしたので、空港からコロンボに入るのには恐らく何度か検問所を通らないといけないだろうと考えていました。実際に何度も検問を受けました。真っ直ぐな眼差しで銃を構えた兵士から、車から降りるように言われ、パスポートのチェックと口頭の質問を受けました。何も怯える事は無いのですが、それまでの経験では銃を前にした事がなかったので結構緊張しました。

しかし、そんな緊張続きの道中で思いがけなかったのは、空港を出てしばらく進んだところにあった、大きな円形の交差点の真ん中にライトアップされた巨大な仏像でした。内戦状態の国だと思っていたのに、その緊張感を忘れさせる何とも大らかな表情をした仏像です。これらの仏像やキリスト像等を見つめる度に緊張感が薄れていきました。その後何度も空港までの道路を走りましたが、日中にこれらの像を見ると車の煤塵や埃で薄汚れていましたがどれもとても良い表情をしていました。やはり、最初に見た時の印象が強く残っています。下方向からのライトアップが効果的だったのですね。

平日はコロンボで仕事をして、週末には地方にある家に帰るとい生活をしているスリランカ人の友人が何人かいました。彼らに誘われて週末にそれぞれ違った地方にある家に行った事があります。何故か仏教徒ばかりだったので、他の宗徒の方の地方での生活は経験出来ませんでした。仏教徒の週末の生活はこんな具合です。

各家に共通しているのは家の内外にたくさんの祠がある事です。各祠には色々な事を担当している神様が宿っているそうです。例えば、井戸の傍には水の神様、台所の隅には火の神様等です。朝早く家人の誰かが庭に生えている樹木から花を採って、それぞれの祠にオイルランプの燈明と共に花

をお供えします。大人も子供も起きると先ずは各神様にお祈りを捧げるために家の内外を歩き回ります。

神様にも格があるようで、祀られている場所を左右から順番に回るのでは無く、行きつ戻りつしながら祠の格に従ってお祈りを捧げて行きます。僕も友人と一緒に何の神様か説明を聞きながら、結構な時間をかけてお祈りを捧げて家の内外を一周させてもらいました。

犬や鳥の鳴き声、猿や他の動物の鳴き声を聞きながらの朝の参拝は気持ちの良いものです。参拝が終わると漸く家族そろっての食事が始まります。

ぼくが訪れるのはいつも週末なので、子供のいる家庭では食事は短時間ですませ、子供を近所のお寺で行われる日曜学校に送り出す準備を始めます。男の子も女の子も真っ白な服を着て行きます。平日の学校と違って仏教に関する色々な事柄を学ぶのだそうです。何を学ぶかは次回でお話しします。

(次号に続く)

**‘わんりい’ は、いつでも入会を歓迎しています。  
年会費：1500円 入会金なし**

**\*入会月によって会費は割引かれます。お問合せ下さい。**

**郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’**

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行し、情報の交換に努めています。

‘わんりい’の活動の様子は、おたより又は‘わんりい’HPをご覧ください。

入会されると

- ①年10回おたよりをお送りします。
- ②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100 (事務局)

- ◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりい’をpdfファイルでお送りします。こちらは無料です。
- ◆町田国際交流センターで、ご自由に取ることができます

宿に荷物をおろし、二人が待つ車に駆け戻った私が乗り込むと、車体の後部がちょっとひしゃげた稲城の白タクは再びコソコソと康定の裏通りを目指して、町外れの路地奥の駐車場に車を停めた。

「よし、ここなら誰にも見つからないからな」

無事安全な場所に車を移動させた二人は、すっかり気が楽になった様子で機嫌良く車を飛び下りると「何処に行きたい?」と私に聞いた。

うーん・・・この旅の道中で出会ってきた人達の口コミから、康定の周囲には日帰りや一泊旅行程度で行かれる温泉や、美しい湖や氷河が見られる場所があるのだと聞いていた。ビサが無くなる日までを逆算しても、あと1日、2日はどこかで寄り道できる余裕はあったし、康定に戻ったらそんな場所に立ち寄って見ようかとも考えてはいたのだが、手持ちの中国元も底をついていたし、今更観光地に行くのも「もういいや・・・」といった気分だった。

「あのね、跑馬山(パオマ山)に行きたい」

「へ・・・? 跑馬山～?」

跑馬山といえば、四川省山間部の山峡に存在する康定はこの跑馬山の山麓に広がる街で、街の何処からでも眺められるその山の名は、中国人なら誰もが知る民歌「康定情歌」にも歌われている康定を象徴する山だ。康定情歌は私がこの地を訪れるずっと以前から聞いたことがあった。韻を踏んだ歌詞とテンポの良いメロディーが印象的で好きな歌だったが、歌詞の背景などは露知らず、2003年に初めて康定を訪れた際、旅に同行していたこの土地の出身者である烏里烏沙氏が「ほら、あれが跑馬山だよ」と頭上の山を指さして、聞き覚えのあるメロディーを口ずさんだのを聞き、初めて自分が馴染のある歌の舞台となっている土地に来ていた事を知ったのだった。

それ時以来康定を訪れるのはもう既に5回目だ。自分がこよなく愛する土地としてしっかり私の心に根を下ろしているこの四川省チベットエリアの旅は、いつも康定に始まり康定に終わっている。旅の思い出の要とも言えるこの街を訪れる度、移動バスの窓から跑馬山を眺めては康定情歌を口ずさんでいた私としては、やはり是非とも一度は押さえておきたいポ

イントだった。

当初は心づもりをしていた康定近郊の氷河も温泉も、なんだか面倒に思えて取りやめてしまった私には、二人に尋ねられるまで特に何をしたい希望も予定もなかったが、あえて思いを巡らせれば旅の道連れも得たこの日は跑馬山観光の絶好の機会だ。

それというのも、いつもバスの窓から眺めていた跑馬山は、街の近郊にある観光山にありがちなロープウェイが点々と山肌に沿って登り降りしており、私もいつかあれに乗りたいと密かな希望を心の片隅で温めていたのだが、女一人でロープウェイなんてあまりにも寂しい。誰かが一緒に行ってくれなきゃ乗りたくない。

しかし、稲城の二人は跑馬山など全く興味無いらしく、私の返答には拍子抜けした様子でちょっと嫌な顔をしていた。が、やはり特にやる事など無い二人は、気乗りはしないがあんたが行きたいなら付き合うよ・・・といった面持ちで嫌々(?) 同行を承諾すると、私達3人は跑馬山の登山口に向かい、康定の街をぶらぶらと歩き始めたのだった。

パオマ〜リュウリュディ♪サ〜ンシャン♪♪・・・(跑馬溜溜的山上・・・)

二人のお供を従えて一人機嫌な私は、自分が歌詞を覚えている部分だけ何度も繰り返し康定情歌を口ずさんだ。二人には鬱陶しかった事と思うが、そのうちジャガイモ兄ちゃんの次仁扎西(チャーレン・ザーシー)にも伝染したらしく、彼も一緒になって康定情歌を口ずさみ始めたのだが酷い音痴だ。伊達男の赤シャツにとっては更に鬱陶しかった事だろう。

私達の歌が悪かったのか、跑馬山のロープウェイ乗り場に着いたところで、赤シャツは自分は登らずに下で待っていると言いだした。行きたくないものは仕方が無い。乗り気な私と本心は行きたくない次仁扎西は、まるでカップルのように2人でロープウェイに乗った。料金は確か3、40元程だったが、本心は行きたくない地元の間人にとってはお安くはない金額かと思え、そこは付き添い料として私が担当した。

そんなこんなで若干無理やり自分の要望を押し通し、めでたく乗る事ができた憧れの跑馬山ロープウェイ

イだったが、曇ったプラスチックの窓から見る景色はさほど美しくも無く、期待したほど眺めが良い訳でもない。不満である。

山頂駅に着き、ロープウェイを降りた私達は肩を並べて跑馬山の山頂付近を散策した。階段を上ると小さなお寺があり、公園があった。まだ工事が完成してないらしく脇にブロックなどが積み上げてあり、人の姿もまばらで閑散としていたが、この辺りの観光地には何処にでもいる貸し民族衣装屋が何軒も店を出し、盛んに写真を撮らないかと誘ってくる。派手な安っぽいインチキ民族衣装で張りぼての獅子に跨り、写真を取って貰うというものだ。次仁扎西がせっかく来たんだから写真を撮れば？ と言ってきたが、私はブンブン首を振り回して断った。山頂に行けば眼下の康定の街を一望にできる景色が見られるのではと期待していたが、公園の周りには木が茂っており展望はゼロ。ハッキリ言ってつまらない。ワザワザやってきた割には大不満である。

さっさと山頂を一回りした後、早々に下山。帰りはロープウェイ代を節約し登山道から歩いて下ったが、日当たりの良い山道は気持ち良く、こっちの方がずっと楽しい。これですぐさま機嫌を直した私は、次仁扎西と稲城や垂丁の話をしながらのんびり歩いた。狭い稲城垂丁の町の事で、私の大好きな垂丁村の少年も、稲城のホテルで出会った可愛い少女、夏姆(シャムウ)も、皆次仁扎西の友人なのだそうだ。「休みの日は俺の車で、みんなと景色のいい場所に遊びに行くんだ・・・」

私にとっては一時の夢の別世界だった土地に、そこを現実の場所として暮らす次仁扎西が羨ましく思えて仕方なかった。旅の道中で出会ってきた皆の顔が次々と浮かんでくる。雪を戴く霊峰が連なる壮大な景色、真っ青な空を背景にはためくタルチョ、光り輝く緑の絨毯が敷き詰められた大草原、色とりどりの高山植物で埋め尽くされる天空の花園、・・・今、そこから立ち去ろうとしている自身の立場を想うと堪らない気持ちだ。

共通の話題で親しみが増した次仁扎西に、思わず「まだ日本に帰りたくない。私も稲城に住みたい」と半ば本気で訴えていると、並んで歩いていた次仁扎西が、実にさりげなく私の肩に手をまわした。

「は？」

ちょっと～！人が感傷的になってるのを良い事に、

調子いいんじゃないの～～？

内心そうは思ったものの、次仁扎西の態度が自然で特に嫌悪を感じなかった事と、そんな男の調子良さがちょっと可笑しくも思えた私は、きっと彼流に親愛の情を表現してるのだらうと好意的に解釈し、特に彼の腕を振り払う事もしなかった。

そう高い山でも無い跑馬山は、歩いてでも大して時間もかからずに下ってしまった。下山道の終点となっていた山の麓に、山肌に張り付くように立っている中国系？の小さなお寺があり、中に入ってみると建物や本尊を祭っている本堂の内部など、年月を経た山寺の様相がなかなか興味深く面白い。今まで何度も歩いていた道路沿いにある寺なのに、これまで気づいてなかったが、結局ここが一番面白かった感じだ。

私と次仁扎西は並んで本尊をお参りした。先ほど拒否を受けなかった事で調子に乗ったのか、その後も要所所でさりげなく私の肩に手をまわしていた次仁扎西は、お参りが終わった後も「さあ、行こう」と、ごく自然に私の肩を軽く抱き山門の方にいざなった。これじゃ他人が見ればまるで恋人同士だ。なんのこっちゃ。

下界に戻ると、街の中で赤シャツが若いチベット族の女の子と一緒に私達の帰りを待っていた。どうやら彼女も稲城の友人仲間らしく、次仁扎西が私を日本から来た旅行者で、稲城にいる時知り合ったのだとひとしきり彼女に紹介すると、赤シャツを隅の方に引っ張っていき、何やら軽く文句をつけている風だったのが「お前、ずるいぞ。何で俺を下に残して、あの子と一緒に居させてくれなかったんだよ」と不満げに言っているのが聞こえてしまった。どうやら好意を寄せている女子と二人で過ごすチャンスを逸した事で、赤シャツにクレームをつけているといった風だが、だったら、ついさっきまで私の肩に手をまわして歩いてたアレは何なんだ？ このお調子者～～!!

まったく男ときたら・・・内心呆れながらも、彼の手のひらを返すようなお調子者っぷりが可笑しくて、思わず心の中で吹き出してしまった私だ。多少腹立たしくもあったが、まあ跑馬山観光にも付き合っただ事だし、人の良い田舎の兄ちゃんである次仁扎西はやっぱりどこか憎めない。今回の件については男心の性として情状酌量の余地を認め、不問に伏すこととした私だった。

(次号に続く)

## 第15回町田発国際ボランティア祭・2012夢広場(10月28日)のホットレポート

●主催：2012夢広場実行委員会 ●共催：(財)町田市文化・国際交流財団

10月28日(日) 10:00～16:00 於：まちの駅「ぼっぼ町田」イベント広場

国際支援と友好活動をしている町田市と町田市周辺のボランティア団体が集結！エスニック料理、民族芸能、各国の民芸品などいっぱいのお縁日！今年も昨年に引き続き「頑張ろう！日本!!」の気持ちを込めて開催された。

天気予報について雨マークが気になっていたが、朝の予報では午後3:00頃から降雨量1mmとのこと。どうにか天気をクリアできるかとの希望空しく、テントを張り終えた頃からポツリポツリと始まった。「ちょっと、ちょっと早すぎるぞ～」。しかも、ポツリポツリはボタボタと大きな雨粒になり、テントに雨漏りも始まった。

今日一日の難儀が予想される中で、‘わんりい’の元気なメンバー達が、‘それ、火起し、それ、香辛料づくり、それ、手作り月餅の袋詰め’といった具合にきびきびと準備を進めた。‘わんりい’メンバー達の作業はいつも感動ものだ。今日みたいな日は特に感じるが、実は昨日今日に始まったことではない。会の活動が始まった時からなのだ。新しいメンバーが作業に加わっても、あっという間にずうっと一緒に活動していたようになる。



朝鮮民族舞踊

雨は幸い30分ほどで、後はからりとは行かないまでも昼前に上がり、会場は17団体が出展する大小15のテントに民族色のある食べ物や民芸品などが並べられ、どうにか祭の体裁が整った。

山下孝之さんのケーナ演奏、永瀬正博さんの馬頭琴演奏等の後、夢広場セレモニーが執り行われた。続いて、オペラ歌手(バ

リトン)の崔宗宝さんの、おおらかな歌声が天に届くほどに響きはじめると、歌声に引き寄せられるように、雨に出足をくじかれた祭会場に人が集まり始めた。続く木曽境川小学校の合唱も素晴らしく、子供達の合唱

風景を見に来た両親や学校の仲間たちが会場の仮設ステージの前を埋めて、一気に祭の雰囲気盛り上がってきた。

‘わんりい’の会は、恒例の“炭火焼・遊牧民風エスニック焼鶏”と餡がたっぷり入った‘手づくり月餅’に加えて、今年は、ラオス・山の子ども文庫基金への支援で、‘ラオスの山岳民族・モン族の手作り刺繍小物’を販売した。

出店場所が3か所になり、人手が分散し、大変な部分もあったが、会のメンバー達や中国人留学生の顧さん、陸さん、戴さん、劉賽男さんが訪ねて来てくれて、最近では珍しくなった炭火焼のジュシーな焼鶏の味を楽しんで貰えた。日頃なかなか会えない会のメンバー達との歓談の機会にもなり、祭の意義は大いにありだ。



‘わんりい’ エスニック焼鶏のブース



‘わんりい’ 手づくり月餅のブース

焼鶏は、今年は超ベテラン腕前の蓮見さんが担当下さり、流石の焼き上がりにたまたま通りかかった人で、焼きたての焼鶏を試しに1本購入し、「美味しい～！」と10本まとめて購入くださる方が何人もいたりした。すぐ嬉しくなり大おまけしてしまおう、そんなところはどうしても素人で、祭参加で活動資金獲得は夢のまた夢ながら、それを以てよしということで今回の祭も無事終了した。

来年は、夢広場会場の「ぼっぼ町田」の改修事業でイベントスペースが半分になってしまうとか。来年の夢広場がどんな形で開催されるのか見えてこないが、できれば、折角15年続いた祭の継続を祈りたい。

(報告：10月28日夜 田井)



熱唱する崔宗宝さん



雨が上がり、崔宗宝さんの歌声に、仮設ステージの前に人が集まりだした。崔さんのアンコール曲もあって、宮沢賢治作詞の「雨にも負けず」が歌われた。



今年の夢広場の目玉、「ピンゴでアジアの国名を知ろう！」ピンゴが成立した人達で商品交換所には長い列ができた。



木曽境川小学校合唱部のステージ

### 中国の笑い話 Ⅲ（「365夜笑話」より）

（翻訳：有為楠君代）

#### 第9話：骨の数

教師：「我々の身体は、206本の骨で成り立っています」

女学生：「私は207本あります」

教師：「それはまた、どうして？」

女学生：「私、今朝、魚の骨を飲み込んでしまいました」

#### 第10話：話：先生に取られてしまった

先生の中には、成績の悪い生徒に体罰を加える先生がいます。ある時、一人の陳という生徒が宿題の作文の名前欄に“東”と書いて提出しました。

先生が、「どうして君の名前“陳”には耳(耳)が無いんだ？」とたずねますと、その生徒は、「先生に引っ張られてなくなりました」と答えました。

#### 第11話：耳と口

二人の孫がおじいさんに聞きました。

「僕たち人間は、どうして耳は二つずつあるのに、口は一つしかないの？」

おじいさんが答えていました。

「思うに、人間は、他の人の意見をよく聞いて、話すのは少ない方が良くからだ。（それに、お前たちに口が二

つずつあったら、わしはうるさくて困ると思うよ。）」

#### 第12話：人間には何故耳があるか

夏の暑い盛り、四合院の庭で、一家が涼みながらおしゃべりをしていました。何かのきっかけで、人間にはどうして耳があるのだろうかとの話題になりました。

京劇の老生俳優である父親はすかさず、「何の不思議も無いよ。耳は、京劇の髯をかける為にあるんだよ」と言いました。

看護師をしている娘は、

「いいえ、耳はマスクをする時のためにあるのよ」と言いました。

おばさんは、ニコニコしながら言いました。

「皆違うよ。耳はイヤリングをする為にあるんだよ」

おじいさんは耳が不自由でしたので、孫娘が手話を交えて、話題を説明すると、やおら議論に加わってきた。おじいさん曰く、

「人間、耳がないと困るものだよ。考えてもご覧、若し耳が無かったら、人間随分みっともない格好になるだろうよ」

## スリランカ映画について（後篇）

為我井 輝忠

前回、スリランカ映画を世界的な存在に押し上げた巨匠レスター・ジェームズ・ピーリス (Lester James Pieris) のことと彼に触発されて続々と新しい監督が誕生したことを書きました。後編では、彼の後に続く監督たちと彼らの作品について述べたいと思います。

ピーリス監督に続く映画監督として、まず、その筆頭とも言える人物はスミトラ・ピーリス (Sumithra Pieris) ではないでしょうか。彼女はL.J.ピーリス監督の夫人で、最初編集者として映画界に入り、1978年に第1作『少女たち』を発表して、スリランカ初の女性監督となりました。第2作は『川のほとり』(1980)、続いて『砂の手紙』(1989)、『長女』(1993)、『マザー・アローン』(1997) 等があります。彼女は駐仏大使としてパリに駐在したこともあります。

1980年代は小説の映画化が活潑になり、マーティン・ヴィクラマシン原作の『ヴィラーガヤ (Viragaya)』を元にしたティッサ・アベセーカラ (Tissa Abeysekera) 監督の『蓮の道』(1987年) は難解で繊細な主人公の性格を、スリランカのスーパースターとも言えるサナットゥ・グラナティラが演じました。『Viragaya』は日本語に翻訳されていますので、読むことは可能です。先に紹介したL.J.ピーリス監督もヴィクラマシンハの三部作『変わりゆく村』、『変革の時代』、『時の終焉』を製作しています。

1990年代に入ると、スリランカのみならず第三世界の国々が抱えるギャング、酒、麻薬、売春、人種問題など様々な社会問題をテーマとした映画が製作されるようになりました。このような新しい傾向を導入したのは、1975年に監督として登場したH.D. プレマラトゥナ (H.D.Premaratne) です。『その橋の下で』(1990年)、『大都会』(1993年) は内外の映画祭で上映され、スリランカの現代社会を

知る助けとなりました。また長い間民族紛争 (スリランカ政府とタミル解放のトラ=LTTE) を題材にした『満月の日の死』(1997年) を製作したプラサナ・ヴィターナゲー (Prasanna Vitanage) 監督の存在も忘れられることはできません。

去る10月末に東京で「東京国際映画祭」が開催され

ましたが、そこでスリランカ映画が上映されました。折よく見る事が出来たのは、アソカ・ハンダガマ (Aso-ka Handagama) 監督の『兵士、その後』(Him, Here After) という作品です。

ストーリーは次のようなもので、「スリランカでは30年に及んだ政府軍と反政府武装組織 (LTTE) の内戦が2009年に終結した。それから2年。LTTEの兵士だった男が村に帰還する。彼はかつての恋人と再会して新しい生活を始める。村人たちの冷たい視線を受けることになる。男は運転手として雇われた先で終戦後の姿に直面していく・・・」。

監督は「子供の頃から兵士として戦闘に参加し、銃の扱い方以外は何も知らない世代にとっては、復員して“普通”の生活

に戻ることも自体がもうひとつの戦争なのです」と語っています。現代スリランカ映画界の鬼才として知られ、作品を発表するたびに議論を呼び起こす監督は、『マイムーン』(2001)、『この翼で飛べたら』(2002)、『レター・オブ・ファイヤー』(2005) 等、スリランカの社会の深奥を見つめた作品を発表しています。

\*アソカ・ハンダガマ監督 Official Website: <http://asokahandagama.com>



スミトラ・ピーリス (Sumithra Pieris)



『マザー・アローン』(1997)の一場面



『兵士、その後』(Him, Here After)

◆わんりいの催し

平成24年度町田市「つながりひろがる地域支援事業」対象事業

**聞いてみよう！留学生たちのスピーチ！！**  
**楽しもう！中国民族音楽！！** ～揚琴、馬頭琴そしてモンゴル民謡～

1部：アンデスの民族楽器・ケーナ演奏 2部：留学生たちのスピーチ  
3部：中国民族音楽 / 馬頭琴 & 揚琴演奏と歌

● 2012年12月2日(日) 13:00～15:45(12:30開場)

● 鶴川市民センター・ホール

(町田市大蔵町1981-4 ☎042-735-5707)

● 参加費：500円(全席自由席)

● 問合&申込：☎042-734-5100 'わんりい'

■ 主催：日中文化交流市民サークル 'わんりい'

■ 後援：町田市 / (財)町田市文化・国際交流財団

■ 協力：

鶴川6丁目団地自治会 / 鶴川団地自治会(5丁目団地)  
鶴川2丁目自治会 / 鶴川平和台自治会 / 能ヶ谷町内会  
鶴川3丁目町内会 / 鶴川4丁目富士見会 / 鶴川団地・センター名店会  
町田市国際交流センター・協力部会 / 日本スリランカ文化交流協会  
NGOアジア草の根交友会 / 中国を知る会(順不同)



美炎(馬頭琴)



チ・ブルグッド  
(馬頭琴)



崔宗宝(歌)



林敏(揚琴)



山下孝之(ケーナ)

◆わんりいの催し

**第14回 中国語で読む・漢詩の会**

▲よく知られている漢詩を、中国語の音とリズムで楽しもう！正しい発音で読めるように練習しよう！漢詩の時代的背景や詩に描かれている情景を知って漢詩を一層楽しもう！

■ 場所：まちだ中央公民館6F・視聴覚室

町田市原町田6-8-1

JR横浜線町田駅ルミネ口2分 / 小田急線南口5分

■ 月日：2012年11月11日(日)

■ 時間：10:00～11:30

■ 講師：植田渥雄先生(現桜美林大学孔子学院講師)

■ 会費：1500円 ■ 定員：20名

\* 録音機をお持ちの方はご持参下さい。

■ 2月の予定：12月16日(日) 町田市民フォーラム・第2学習室A ※中央公民館ではありません。

◆お申込み：☎050-1531-8622(わんりい)

E-mail: ukiuki65jpp@yahoo.co.jp



◆わんりいの催し

**〈ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう!〉 Vol.3**

◆会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など) ◆定員：15名(原則として)

▲ 2012年11月24日(火) 10:15～11:45

▲ 場所：まちだ中央公民館・6F 視聴覚室

田市原町田6-8-1 / 小田急線町田駅南口徒歩5分

JR横浜線町田駅ルミネ口徒歩3分

▲ 講師：Emme(歌手)

東京芸術大学邦楽科長唄別科卒業。日本の伝統音楽・長唄の素養をバックにした、たおやかなオリエンタルヴォイスの独自の歌のスタイルを誕生させている。

日本人が長い間、嬉しいとき辛いときの折々に歌ってきた童謡や抒情歌などの愛唱歌は、日本人の心の歌といえるでしょう。ボイストレーニングを組み合わせ、気持ちよく歌いましょう。



▲ 12月予定：11月11日(土) 10:15～11:45  
練習用の歌は、参加者の希望で決めます。

◆当日は動きやすい楽な服装でご参加ください

● 申込み：わんりい ☎042-734-5100

E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp

日中国交正常化40年記念公演

**河野克典・崔宗宝**

**日本と中国の、二大バリトン夢の競演**

2012年12月10日(月) 18:30開演

上野東京文化会館・小ホール(上野公園口前)

予定曲目:赤とんぼ、荒城の月、万里の長城、菩提樹、オーソレミオ、帰れソレントへ 他

●参加費:4,000円(前売り/当日4,500円)  
全席指定席

●問合せ:0489-35-0836(崔宗宝音楽事務所)

●申込:FAX:046-235-2716

\*氏名、住所、電話番号、枚数を記入の上、ファックスを。チケットと一緒に郵便振替用紙を郵送します。

▲主催:崔宗宝友の会 ▲企画:崔宗宝音楽事務所

### 中国を知る会・11月例会に参加しませんか

「中国を知る会」は、まちだ市民大学2000年度「国際学」受講生によって2001年4月に発足した会です。現代中国を、会員が選んだテーマについて、いろいろな角度から学習した成果を発表し合い、情報交換しています。11月はこの8月に中国東北部(大連、瀋陽、長春)を旅行して来たばかりの為我井氏にそのレポートをしていただきます。

#### ▲旧満州を歩く—スライドと講演

●お 話:為我井輝忠氏

●日 時:11月19日(月) 18:00~20:30

●場 所:町田中央公民館 視聴覚室(定員36名)

●参加費:無料

●申込み:床呂英一

Eメール:m-tokoro@mta.biglobe.ne.jp

◆メール対応が不可の方は、FAXで田井が申し込みを受けます。FAX:042-734-5100

### 【'わんりい'の原稿を募集しています】

'わんりい'は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と関係者の皆さんの原稿でまとめられています。中国で体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。又'わんりい'に掲載の記事などについても簡単なご感想をお寄せいただけると存じます。

日中文化交流市民サークル'わんりい'

#### [11月の定例会及び11月'わんりい'発行日]

◆定例会:11月5日(月) 13:30~ (田井宅)

◆12月号の発行日:12月3日(月) 13:30~ (田井宅)

【町田国際交流センターの催し】

### 「第10回留学生トークプラザ」

~留学生の話を聞いてみませんか~

留学生からの要望「市民との交流の場がほしい」から始まった「留学生トークプラザ」では、毎回、留学生たちのすばらしい日本語と、異なる視点からの鋭い観察力と主張に驚かされます。

今年も町田市及び近隣の大学で勉強している留学生たちが、日本の印象、日々の生活実態、将来の夢などを日本語で発表します。発表終了後、留学生との意見交換の時間を設けました。皆様のご参加をお待ちします。

●2012年11月10日(土)

●14:00~17:00(開場13:30~)

●会場:町田市立中央図書館6階ホール

●定員:60名(定員になり次第締め切ります)

●参加無料

◆主 催:町田国際交流センター(国際理解部会担当)

◆後 援:町田市

◆問合せ:☎042-722-4260(町田国際交流センター)

◆申し込み:住所、氏名、電話番号と参加人員を記入の上、FAXで042-722-5330(町田国際交流センター)へ

\*受け付け確認の通知はありません。直接会場へおいで下さい。

### 第31回スリランカ研究フォーラム

スリランカの文化・社会・日本とスリランカの関係について情報を持ち寄り分かち合ひましょう。

●2012年11月11日(日) 14:00~17:30

●和光大学、ぱいでいあ5階(小田急線鶴川駅前)

●参加:無料

●第I部 研究動向

①ブンニャ・クマーリ(作家)氏

「スリランカの民話と児童文学」

②川島耕司(国土館大学教授)氏

「スリランカ政治とカースト」

●第II部 談話会(グループや個人の近況報告など)

高桑 史子「内戦の後を訪ねて」、他

◆問合せ:和光大学現代人間学部 澁谷研究室

☎044-988-7777(内線5904)

Eメール:shibuya@wako.ac.jp

#### 使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。古切手は周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に'わんりい'の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。